

作家の高橋源一郎氏が『ぼくらの戦争なんだぜ』を上梓している。「まえがき」に「『彼らの戦争』について考えながら、それは、いつの間にか、『僕らの戦争』について考えることに変わっていった」とある。戦争に関する教科書、文芸、映画、アニメなどを引用して、多岐に渡り論述している。私は読んだことも、見たこともないものが多かったので、受け止められないこともあったが、遠い「彼らの戦争」から近い「僕らの戦争」に認識が変わっていく、また、変わっていかなければならないということが一貫したテーマである。朝日新書の450頁を超える本だが、二点について感じたことを紹介したい。

1942年に「日本文学報告会」が作られ、作家たちはこれに入会し、戦意高揚の文章を書かせられた。入会しなければ、ものを書けない状況であった。189人の著名な詩人たちの詩を編集した『詩集 大東亜』が1944年に出版された。最大のスターだった高村光太郎は「序」に下記のように書いている。「ただ是れ利のゆゑに吾が神国を窘（たしな）めんとする米英等醜（しこ）のともがらを悉く打ち祓ひ、吾が神ながらの道と力と徳とによって世界をすすぎ清めんとする此の聖戦のみ旨を、われら臣民一人として知らざるはない。」そして、下記のような詩を掲載している。「やがて、若者は用意の馬に乗り、駅に向かって出発する。見送る眸。たのむぞと力をこめた眸。引受けたと 振返る若者の眸。雨と風の村はづれ。日本の村の 力と美の高く光る門出だ。尊い門出だ。出征だ。」高橋氏は、「大きな目標」に駆り立てるための「大きな言葉」と受け止めている。一方、中国に出征した6人の兵士の詩を集めた『野戦詩集』を発掘し、紹介している。加藤愛夫は、「兵隊闊歩の中を 中国の民はうつむけにゆく」と、征服した中国の街に意気揚々と入ってゆくが、中国人のうつむいた姿を見つめている。佐川英三は「馬 斃る」に「馬は、はや草も食まざりき、地に頭を伏し、願へばとて、叱咤せばとて、微かに眼を開くのみ。その眼の色見るは切なかりけり。瘦せ細り。疲れ衰へ、遂に路傍に放せられたりき。ああ、捨てられたりき」と、戦場で倒れた馬にまなざしを向けている。高橋氏は、個人的なことを書いたこれらの詩を「小さな言葉」と受け止めている。そして、「大きな言葉」は思考停止を誘い、議論を起こさない、そこにあるのは、言葉にならない空気、雰囲気である。「小さな言葉」は、戦争はなぜ人の心を失わせるのかを問い、実感した言葉を紡ぎ出している。高橋氏は、『野戦詩集』には、有名な詩人はいないが、「奇跡のような優れた詩集」であると絶賛している。戦争を、どこで、どのよう捉えるかを問いかけているのである。

高橋氏は、太宰治を「戦争小説家」と捉えている。私は高校生の頃、太宰に惹かれ、愛読した。図書室の先生に『太宰治 全集』を買ってくれとお願いし、購入してもらった。その頃、太宰を「戦争小説家」などと思ったこともない。しかし、高橋氏は、太宰が小説を書いた年代と日本が戦争に突き進んでいった年代を重ね合わせ、太宰は戦争と向き合っていると分析している。1941年12月8日は、真珠湾攻撃に成功し、日本中が緊張と感動で沸き上がった。太宰は『12月8日』という短編で、貧しい家庭の主婦の日記という体裁で、訪ねて来た人と主人は会話を交わし、「西太平洋って、どの辺だね？サンフランシスコかね？」と、全く感動していない会話を綴っている。当時としては、あり得ない会話であろう。戦時下では、書くことは難しく、書けないことが多い。しかし、だからこそ、作家は全力を傾けて書く。高橋氏は、太宰は加害の国の戦時下の作家として、危険であることを承知で、「大きな言葉」でなく、「小さな言葉」で、醒めて、淡々と書いたと読み解いている。戦争の実態を身近な実生活の中で、問い続けることの大切さを知らされた。